

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720011

研究課題名(和文) フランス科学認識論の成立にかんする思想史および文化・社会史の複合的研究

研究課題名(英文) Integral research of history of Ideas and the cultural and social history on establishment of the french epistemology

研究代表者

近藤 和敬 (Kondo, Kazunori)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：90608572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、20世紀前半の戦間期のヨーロッパ、とくにフランスにおいて、科学がどのように哲学によって理解されるようになり、その理解がそれ以前の哲学における科学の理解とどのように変化してきたのか、またその理解がその時代の他の文化的、社会的な考え方とどのような関係にあったのかということ、特にジャン・カヴァイエスの事例を中心に文献学的、史学的方法を用いて調査、研究を行った。

このような研究によって、現在の科学についての哲学的、社会学的な理解を相対化し、それらとは異なる角度から現在の社会における科学について理解することが可能になるという点にその現在の意義が見出される。

研究成果の概要(英文)：This research program studied with a focus on the case of Jean Cavailles how science came to be understood by philosophy, what kind of point the understanding changed at in comparison with scientific understanding in the philosophy before it and what kind of relation the understanding had with other ways of thinking in cultural and social region of that time in Europe during the interwar period of the early 20th century.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：エピステモロジー 科学認識論 カヴァイエス 概念の哲学 科学論

1. 研究開始当初の背景

本研究では、科学認識論（エピステモロジー：科学史の哲学）が 20 世紀初頭にフランスで成立したことの時代背景と動機付けおよびそれによる影響関係を、当時の思想的、文化的、社会的、制度的状況の絡み合う複合的な相のもとで実証的かつ具体的に解明することを目指す。

現在、科学技術論、科学技術人類学、科学技術社会学などの分野では、現代のさまざまな倫理的、政治的、社会的問題を、科学（自然）と社会（政治、文化）の様々な次元での分離から生じるものと考え、それを乗り越えるために総合的な視座から科学と社会を統合する道を確立することを目指す研究が注目を集めている（B. ラトゥール『科学が作られているとき』産業図書、1999 年、小林傳司『トランス・サイエンスの時代 科学技術と社会をつなぐ』NTT 出版、2007 年）。

このような中で、科学コミュニケーションや科学社会学の観点からだけではなく、より思想的、哲学的な視座から科学と社会の横断的な総合を目指す研究にも注目が集まり始めている。たとえば、ラトゥールはこのような観点から、I. スタンジェールや I. ハッキングらの科学哲学者らとともに、形而上学的な水準も含めた理論構築の試みを始めている（L. Bryant, N. Srnicek & G. Harman, ed., *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, Re.Press, 2011.）。

しかし、このような哲学的な問題関心が高まるにつれて、思想史の分野において重大な問題が浮上してきた。すなわち、現代の科学技術論が提示する科学と社会についての考え方や、20 世紀の科学認識論が提示してきたものをどのように関連付け、整理するのかという問題である。現代の科学技術論の立場のなかにも、ラトゥールのように 20 世紀初頭の G. タルド、W. ジェームズ、A. N. ホワイトヘッドなどの哲学者を、科学と社会の分裂

を乗り越えようとした現在の科学技術論の先駆者として高く評価する例外的な立場もあるが、多くの場合、科学技術論においてはこれまでの科学認識論の成果を積極的に参照しないことのほうが多い。しかし、最近の研究では、20 世紀初頭に黎明期にあった科学認識論を代表する J. カヴァイエスが、彼の時代から顕著になり始める科学と社会（自然科学と人文学）の二元分裂を乗り越えることを強い問題意識としてもっていたことが明らかにされつつあり、このような問題意識との関連で科学認識論の歴史的な研究を行う必要性が高まっている（H. Sinaceur, « Jean Cavailles, Lettres à É. Borne (1930-1931), avec présentation par H. B. Sinaceur », dans *revue philosophie*, no. 107, Les Éditions de Minuit, 2009、近藤[招待講演 2011 年、於日仏哲学会]「研究業績」参照）。20 世紀初頭の科学認識論は、産業社会と科学研究が密接なつながりを持ち始め、大学という公共機関が制度として巨大化するなかで、人文学と自然科学の分離対立が積極的に進められる時代に誕生したのであり、まさに現代の科学技術論の先駆とも言える。それゆえ、昨今の科学技術論などの試みを歴史的に正しく評価するためにも、20 世紀（とりわけ前半）の科学認識論の歴史を、科学（自然）と社会（文化）の分離を乗り越えるという現在の問題関心の視座からとらえなおしその価値を再評価すること、また思想、文化、社会、制度を渡る複合的な相のもとでそれを具体的に研究し、その問題関心、動機づけ、社会制度への影響関係を明らかにすることが、現在の重要な関心となっていると言える（金森修編著『エピステモロジーの現在』慶応大各出版会、2009 年、金森修、近藤和敬、森元齋編著『Vol05 特集 = エピステモロジー』以文社、2011 年）。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、

- (1) 科学と社会、自然科学と人文科学の分離が、思想的にも制度的にも顕著になり始める 20 世紀初頭に、このような問題意識にたいして科学認識論がどのような解決を求めたのかを明らかにし、
- (2) 科学と社会のあいだに模索されるべき新たな関係の構築という現在の問題関心にたいして、科学認識論研究の視座から独自の解決策を提案することを目指すことである。

本研究では、科学と社会、自然科学と人文科学のあいだの急速な分離がすすむ 20 世紀初頭にフランスで登場する科学認識論に焦点を当て、それが当時の思想、文化、社会、政治の複合的な状況のなかで、どのような動機のもとで必要とされ、またそこでどのような機能をもち、そのなかでどのような影響関係をもつことができたのかということをも具体的、実証的に明らかにすることを目指す。この目的を達成するために、本研究では、二つの研究視座を設定し、それらを複数のレベルで総合することを試みる。その研究視座とは以下の二つである。

(1) **思想史研究** : (あ) 科学認識論内部のミクロな関係・構造の分析、(い) 科学認識論と同時代の思想潮流のマクロな関係・構造の分析、(う) 哲学以外の思想 (宗教・政治) との関係の分析。

(2) **文化・社会史研究** : (あ) 思想の文化的側面の分析。(い) 思想の制度的側面の分析。

本研究では、これら二つの視座を組み合わせ、初期の科学認識論者のなかでも **J. カヴァイエス** を研究全体の焦点として設定することで、当時の思想、文化、社会、制度の複合的な文脈を明らかにすることを目指す。カヴァイエスを焦点として設定することで、申請者がこれまで行ってきたカヴァイエスの数理哲学についての研究を基盤としつつ、そ

れを特に思想史、文化・社会史の方向 (**以下の四点**) に発展させることができるだけでなく、分析の焦点を定めることで、思想史と社会史の錯綜した全体がより鮮明に浮かびあがることを期待される。

(1) カヴァイエスの思想を、その理論的な論理だけでなく、彼が直接的に影響関係を維持した科学認識論者であり数理哲学者でもある L. ブランシュヴィックおよび A. ロトマンらとの思想的な関係について明らかにする。

(2) カヴァイエスの思想を中心とした科学認識論の思想が、当時の思想的な潮流とどのように自覚的、無自覚的に自らを差異化していたのか、あるいはどのような影響を受けてきたのかということについて、フッサール現象学や論理実証主義など数理哲学の範囲を越えて広く明らかにする。たとえば、新カント派、ドイツ観念論、解釈学、ハイデガーの現象学、実存主義、プラグマティズム、ベルクソンなどの新哲学が、ここでの検討対象に含まれる。

(3) カヴァイエスの宗教関連の論文、手紙、日記などを中心に、ブランシュヴィックの宗教思想なども含めて、科学認識論における宗教論、社会論が当時の文化的、社会的、政治的な状況とどのような関係にあったのかということをも明らかにする。

(4) フランスでの科学認識論という研究分野が、フランスの大学制度、教育制度においてどのような意義と動機付けをもったものであったのか、その影響はどのように評価できるのかということについて、またそのような動機付けが科学認識論の思想内容がどのように関連しているのかということについて明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、以下を基本単位とする研究サイクルを設定する。

(1) 関連する文献および資料の収集。

(2) 収集した資料の分析、読解。

科学認識論にかんする非公刊の資料(手紙、遺稿など)を複写、撮影、収集する。

収集する資料には、主に以下のような種類が含まれる。

- ・ カヴァイエスを含む科学認識論関連の一次文献および二次文献で未入手のもの。
- ・ 科学認識論と関連をもつ諸思想の一次文献および二次文献で未入手のもの。
- ・ カヴァイエス、ロトマン、ブランシュヴィックらの書簡類、記録文書等、また彼らの宗教運動、レジスタンス活動関連の論文、著作等で未入手、未発掘のもの。
- ・ 上記と同時期のフランスの科学技術史、大学制度史にかんする一次資料および二次文献。

4 . 研究成果

一年目は、まず「自然科学と人文科学の分離が、思想的にも制度的にも顕著になり始める20世紀初頭に、このような問題意識に対して科学認識論がどのような解決を求めたのかを明らかにする」という研究目的(1)のために、フランスでの現地資料調査を行った。その成果は以下である。

(1) 国立文書館においてカヴァイエスの未発表の原稿を発見した。

(2) クレルモン＝フェラン大学においてカヴァイエス研究者らと情報交換を行い、特にカヴァイエスの宗教的および社会的活動と、彼の思想との関連について意見交換を行った。

(3) ミシェル・ブリーヴセンターでカヴァイエスの手稿の写真を撮影した。この手稿は、エティエンヌ・ボルンにあてられた手紙であり、Sinaceur がタイプ化し出版したもののオリジナルに相当する。

(4) ボルドーのジャン・ムーランセンターでカヴァイエスの未公開のタイプ原稿を発

見した。

(5) パリのレジスタンス博物館で彼がかかわっていたレジスタンス運動関係資料の撮影を行うことができた。主に Liberation 関連の配布資料である。

つぎに、「科学と社会のあいだに模索されるべき新たな関係の構築という現在の問題関心にたいして、科学認識論研究の視座から独自の解決策を提案することを目指す」という研究目的(2)のために、雑誌『現代思想』で連載した論文をまとめた『数学的経験の哲学 エピステモロジーの冒険』を公刊し、そこにおいて、この目的にたいする一定の回答を試みた。この試みにおいて明らかにされたこととして、エピステモロジーの研究が、近代以降において顕著にみられる個人主義的で人間主義的な知性観を乗り越えんとする問題意識によって駆動されていたという特徴が本質的なものとして示されたことが挙げられる。そのような知性観において重要な役割を果たすのが、真理ではなく、むしろそれを解とみなすような問題ないし問いの次元である。科学研究は、本質的には、このような問題ないし問いの次元からの要求によって自己を改定し、拡張しようとする動きによって駆動される。カヴァイエスにおいては、このような科学研究に対する理解が、彼の宗教的な文化的文脈やその実践的経験と強く結びついていたことが、先の研究目的(1)で収集された資料から明らかにされたことで、その思想的な関連文脈が、単に科学的なものに限定されたものではないことが明らかにされた。

二年目は、「自然科学と人文科学の分離が、思想的にも制度的にも顕著になり始める20世紀初頭に、このような問題意識に対して科学認識論がどのような解決を求めたのかを明らかにする」という研究目的(1)のために、前年度の海外での資料収集の研究成果の分析を進めると同時に、その思想的な中心

人物であった、ジャン・カヴァイエスの重要著作である『論理学と学知の理論について』の翻訳を行い、その解説を付すことで、これまでの研究成果を公刊した(ジャン・カヴァイエス『構造と生成 II 論理学と学知の理論について』近藤和敬訳・解説、月曜社、二〇一三年)。

つぎに、「科学と社会のあいだに模索されるべき新たな関係の構築という現在の問題関心にたいして、科学認識論研究の視座から独自の解決策を提案することを目指す」という研究目的(2)のために、海外および国内から複数の研究者の協力を得て、研究会を行った。この研究成果については、雑誌『現代思想 特集=ガタリ』に所収の鼎談、及び雑誌『現代思想 特集=現代思想の転回 2014』に所収の拙論「問題 認識論と問い 存在論 ドゥルーズからメイヤスー、デランダへ」および翻訳(M・デランダ著)「ドゥルーズ、数学、實在論的存在論」の形で公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

1. 近藤和敬, 「真理の生成 第5回 問うこと、過程、主体」, 『現代思想』・青土社, No.4月号, pp.38-52 (2012). 査読無
2. 近藤和敬, 「真理の生成 第6回 問題 主体の記述の「かた」について」, 『現代思想』・青土社, No.5月号, pp.22-35 (2012). 査読無
3. 近藤和敬, 「問いあるいは懐疑の脈絡」, 『現代思想』・青土社, No.6月号, pp.8-23 (2012). 査読無
4. 近藤和敬, 「真理の生成の超越論的条件としての記号的宇宙」, 『現代思想』・青土社, No.7月号, pp.21-35 (2012). 査読無

5. 近藤和敬, 「自然あるいは宇宙のほうへ (一): 「一つの生」としての「懐疑の脈」」, 『現代思想』・青土社, No.8月号, pp.42-56 (2012). 査読無
6. 近藤和敬, 「自然あるいは宇宙のほうへ (二): 自然/生命の不定性」, 『現代思想』・青土社, No.9月号, pp.14-29 (2012). 査読無
7. 近藤和敬, 「文脈の不定性、記述のプトレマイオスの展開」, 『現代思想』・青土社, No.10月号, pp.16-29 (2012). 査読無
8. 近藤和敬, 「真理の生成 第12回 記述の多島の生成、あるいは「海の子」になること」, 『現代思想』・青土社, No.11月号, pp.15-31 (2012). 査読無
9. 近藤和敬, 「真理の生成 最終回 過程としての「真理」」, 『現代思想』・青土社, No.12月号, pp.8-15 (2012). 査読無
10. 近藤和敬、篠原雅武、村澤真保呂, 「(鼎談)「破局」の「全体性」の只中で思考しつづけるために 「現代思想」の交錯点と多元的展開」, 『現代思想 特集=現代思想の総展望 2013』・青土社, Vol.41, No.1, pp.80-100 (2013). 査読無
11. 杉村昌昭・村澤真保呂・近藤和敬, 「ガタリ化する世界 いくつもの逃走線をつないで」, 『現代思想 特集=フェリックス・ガタリ』(青土社), Vol.41, No.8, pp.32-51 (2013). 査読無
12. 近藤和敬, 「書評 『金森修編 合理性の考古学』」, 『フランス哲学・思想研究』, Vol.18, pp.208-213 (2013). 査読無
13. 近藤和敬, 「問題 認識論と問い 存在論」, 現代思想, Vol.42, No.1, pp.58-73 (2014). 査読無
14. マヌエル・デランダ(近藤和敬訳), ドゥルーズ、数学、實在論的存在論, 現代

思想, Vol. 42, No. 1, pp. 162-178 (2014).
査読無

15. 近藤和敬, 「カヴァイエスの「一般化の理論」の形式化に向けた考察, 人文学科論集, No. 79, pp. 17-28 (2014). 査読無

〔学会発表〕(計8件)

1. 近藤和敬, 「カヴァイエスにおける「操作」と「概念」について」, 西日本哲学学会, 2012年12月(別府大学).
2. 近藤和敬, 「現代思想における比喻としての《島》 ドゥルーズの「島」概念についての一考察」, 国際島嶼研究センター、第137回島嶼研究会, 2013年1月(鹿児島大学).
3. 近藤和敬, 「ドゥルーズ=デラングの「双対性」、「準原因作用子」、「問い問題解の区別」にかんする思想的考察」, 共同開催 第24回計測自動制御学会SI部門 共創システム部会研究会 第7回 内部観測研究会, 2013年3月(理化学研究所(和光キャンパス)).
4. 近藤和敬, 「フーコーの生権力論と現代哲学『構成主義的实在論』の一試論として」, 鹿児島哲学学会, 2013年5月(鹿児島大学).
5. 近藤和敬, 「超越論的なものと問い: 内部観測, バイトソン, パース, ドゥルーズにみる「準实在」」, 『思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方 2013年第2回研究会』, 2013年6月(東京外国語大学(東京)).
6. 近藤和敬, 「機械の両義性 在来知と近代科学の比較の第三項としての機械知性に向けて(第一部)」, 『「在来知と近代科学」(IK&MS) 科研第2回研究会』, 2013年6月(大阪大学(大阪)).

7. Kazunori Kondo, “Sketch of a historical essay for enabling comparison of Modern Science and Indigenous Knowledge”, The 4th IK & MS Project Meeting 1130-1201, 2013 > A Comparative Study of “Indigenous Knowledge” and “Modern Science”, Nov. 30, 2013 (Kagoshima University (Kagoshima)), 2013年12月(kagohisma (japan)).
8. 近藤和敬, 「カヴァイエスのスピノザ主義の再解釈の試み l’absolu d’intelligibilité の肯定」, 第一回エピステモロジーの伏流としてのスピノザ研究会, 2013年12月(大阪).

〔図書〕(計3件)

1. 金森修(編著)、近藤和敬、原田雅樹、中村大介、米虫正巳、藤田尚志、林田愛, 『エピステモロジー 20世紀のフランス科学思想史』(分担箇所: 「第一章 グランジェの科学認識論 「操作対象の双対性」、「形式的内容」、「記号的宇宙」」), 慶応大学出版会, pp. 37-105 (2013).
2. 近藤和敬, 『数学的経験の哲学 エピステモロジーの冒険』, 青土社, 436頁(2013).
3. ジャン・カヴァイエス(近藤和敬訳・解説), 『論理学と学知の理論について』, 月曜社, 186頁(2013).

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://retrosection.wix.com/cahierepistemologue>

6. 研究組織

(1) 研究代表者(KONDOU KAZUNORI)

近藤 和敬 鹿児島大学・法文学部・准教授
研究者番号: 90608572